

# 木想開花

国際文化交流学科3年 北野 頌麒

霜降の先には極寒の眠りがある  
葉は枯れ代わる季節に漂う夢  
綺麗に積もらせた山道の先に何を見る

枯れ葉積もる山の中  
彩る零余子たちは  
ためらいも無く大地にその根を根付かせる

夢想のさなかに浴びた稲妻は  
葉を焼きその身を焼楢に変える  
憂鬱の夕焼けは彼方先までつづく

夕暮れ照らす黄昏の中  
焦げて晒された幹には  
ためらいも無く朱色の陽光が注がれる

宵闇の月光に照らされて  
獲物を狙う梟は枝から飛び降りる  
逃げ纏う野兎に振り下ろされる爪

大地へ帰る命たちに  
その身焦がして尚聳え立つ楢の色は何を思う  
無数の花を咲かせよう  
はなむけは遙か大空へと向けた無数の花  
楢の色の夢語り

晴れ渡る初夏の空  
吸い込まれるように  
溶けていくように  
花たちは散っていく

傲慢に群れる魂たちは  
妥当たる量を忘れ求めすぎて

幾千の花たちが  
散り行くけれども  
花たちはまた咲く  
四季は廻り繰り返す

傲慢に群れる魂たちは  
自ら造り忘れて廃れさせて

草木たちは積もらせる  
溢れ出るように  
こぼれていくように  
萌え出る恋心を

傲慢に群れる魂たちは  
忘れてはならないこの思い

さんさんと照らす太陽は  
ひとからげに思いを育てる  
草木たちは夢を見る  
巡る季節の果てを

寒露漂う秋の中  
大地へ帰る命たちに  
ためらいも無く聳え立つ楢の色は何を思う

冬の向こうには  
綺麗な夢がある  
纏う雪を揺さぶり落とす  
なんどもなんども

冬の向こうには  
夢に見た景色  
纏う雪が嘲け笑う  
なんどもなんども

ひび割れたその身に  
真つ白な雪がそつとふれる  
心までも冷えてしまうほどに  
真つ白な雪は微笑んでいる

冬の向こうには  
清明の日がある  
纏う雪が積もっていく  
なんどもなんども

冬の向こうには  
繋がれた記憶  
纏う雪が溶け落ちていく  
なんどもなんども

ひび割れたその身に  
真つ白な光がそつと注ぐ  
心まで温ったまってしまうほどに  
真つ白な光は微笑んでいる

美しく乱れよ満開の花  
狂ってしまうほど激しく散らせ  
春風と共に

傲慢に群れる魂たちは  
妥当たる量を忘れ求めすぎて  
息をすることも間々ならない  
されどためらいも無く聳え立つ楳の色は咲かす  
はなむけは遙か大空へと

激しく舞えよ満開の花  
大地へ還したただ溶けゆこう  
春風と共に

傲慢に群れる魂たちは  
忘れてはならないこの思い  
果てしなく続く悠久の螺旋  
されどためらいも無く人々は自然を破壊する  
はなむけは汚染された空気

されどためらいも無く聳え立つ楳の色は思う  
ひび割れたその身が尽きるまで  
この身が消えゆくその時まで  
魂も全て捧げ  
咲き乱れよう  
最後の時まで  
優雅に散らせ楳の花  
朽ち果てるその身ともども  
舞い散らそう鮮やかに